

# 芥川の志賀観とその文学における「家」

李 光 華

## 一、はじめに

晩年の芥川龍之介が自分の文学的行路の終点に立ってふりかえる時に、志賀直哉に劣等感を抱き、ほとんど無条件に近い志賀直哉に尊敬の意を表している。生活者と芸術家との矛盾というもののない志賀直哉は芥川龍之介的なものとは対蹠的な存在である。本論では芥川龍之介の志賀観の根底にあるその文学に現れる「家」の相違からこの異質な二人の作家にアプローチしたい。

## 二、芥川の志賀観と「沓掛にて」における芥川龍之介

芥川龍之介は志賀直哉に対して終始敬愛の念を持ち、文学出発期のはじめから志賀直哉に関心を寄せた。大正三、四年頃の執筆と推定されている未定稿「志賀直哉氏の短篇」(⑩ 1) がそれを証している。

「志賀直哉氏の短篇」は芥川が志賀直哉に対する尊敬から「初めて書いた評論」である。

その中に「僕は、現在の氏に対する尊敬を、未来の氏が、更に大きな尊敬に導く事を祈り、同時にこの稿が、僕の初めて書いた評論であることを記して…」と書かれている。

そして、志賀の短篇小説の特色については、この未定稿で「志賀直哉氏の短篇を一貫してゐる特色は、一言にして云へば知的な事である」と指摘し、更に「氏の短篇を一貫してゐる著しい三つの特色は深さと正確さと美しさである」ことを付け加えている。

また、芥川の遺稿となった「歯車」(『文芸春秋』昭和2年10月)では「僕はベッドの上に転がったまま、「暗夜行路」を読みはじめた。主人公の精神的闘争は——僕には痛切だった。僕はこの主人公に比べると、どのくらい僕の阿呆だったかを感じ、いつか涙を流していた」と叙述している。(⑩ 2)

それから、昭和二年の雑誌『改造』に掲載された芥川の「文芸的、余りに文芸的な」(⑩3)の評論にも一貫して志賀直哉賛美のことが綴られている。

「志賀直哉氏は僕等のうちでも最も純粋な作家——でなければ最も純粋な作家たちの一人である」と書き出している。

- (一) 志賀直哉氏の作品は何よりも先にこの人生を立派に生きてゐる作家の作品である。(略) この人生を立派に生きることは第一には神のやうに生きることであらう。志賀直哉氏も亦地上にゐる神のやうに生きてゐないかも知れない。が、少なくとも清潔に、(これは第二の美德である)生きてゐることは確かである。(略)
- (二) 志賀直哉氏は描写の上には空想を頼まないリアリストである。その又リアリズムの細に入つてゐることは少しも前人の後に落ちない。若しこの一点を論ずるとすれば、僕は何の誇張もなしに、トルストイよりも細かいと云ひ得るであらう。(略)。
- (三) (略) 同氏はこのリアリズムに東洋的伝統の上に立つた詩的精神を流しこんでゐる。同氏のエビゴオネンの及ばないのはこの一点にあると云つても差し支へない。これこそ又僕等に、——少くとも僕に最も及び難い特色である。(略)」
- (四) 更に又やはり作家たる僕は志賀直哉氏のテクニクにも注意を怠らない一人である。(略)」
- (五) (略) 志賀直哉氏の「児を盗む話」は西鶴の「子供地藏」(大下馬)を思はせ易い。が、更に「范の犯罪」はモオパスサンの「ラルティスト」(?)を思はせるであらう(略)けれども西鶴の「子供地藏」は勿論、モオパスサンの「ラルティスト」も志賀直哉氏の作品には何の関係も持つてゐない。これは後世の批評家たちに模倣呼ばはりをしてさせぬ為に特にちよつとつけ加へるのである」。

上記の叙述から芥川の志賀直哉に対する敬愛は、少し情熱的な色彩を帯びていることが察知できよう。

(五)の西鶴、モーパサン云々の件については、志賀直哉側の文章にも、それに対応した部分を見出すことができる。昭和二年七月三十日に書いた書簡「沓掛にて」(⑩4)の中に以下のような一節がある。

「その日、芥川君は私の「児を盗む話」といふ短篇が西鶴の「諸国物語」の一節から来てゐるのではないかと云ふので、私は「諸国物語」は一つも読んだ事もなく、前に書いた「剃刀」といふのも似た話がビアズレーか誰かの詩にあ

る事、それから「范の犯罪」といふのが、テーマは反対だがモウパッサンに似たものがある由聞いた事などといふと、芥川君が後人の為め何時かそれらを書いて置く必要があるだらうと勧めてくれた。私は西鶴は常に手元に置きながら、未だに其「諸国物語」を読んで見ない程で、芥川君にすすめられてからも何年となく、それらを書かずにゐたら、却つて芥川君が何かに書いてくれた」。

自己の素質を創作に生かしている志賀直哉と対照的に、芥川の創作には確かに作品離れの部分がある。それゆえ、芥川の指摘に志賀直哉のほうはさきわめてあっさりしていて、泰然自若とした余裕が感じられる。作家としての二人の性質的な相違がここから読み取ることができると思う。

芥川龍之介と志賀直哉との関係について、同時代を生活している文学者の間にもいろいろな説がある。正宗白鳥は「志賀直哉論」(『中央公論』昭和三年、十月)の中に次のようなエピソードを書いている。

「芥川龍之介氏は、あれほどの天才でありながら、志賀氏の前へ出ると頭が上がらなかったといふことも、この頃聞いた。去年芥川変死の後間もなく、軽井沢に私を訪ねて来た某氏の話によると、志賀氏は芥川氏の作品をも人となりをも、あまり好まなかったそうだ。それ故、面と向かって芥川氏から敬意を表せられる時には、返答に困つたさうだ。私はその話を聞いた時、「何だ。芥川は志賀なんかに對して引き目を感じる訳はないぢやないか。」と、口に出かかるのを危く圧へた。龍之介は直哉の芸術のどういふところに畏服したのであるかと、私はあとでいろいろに考へた。それから、自分を軽視してゐる人の前でその人を讃美することの、いかに頓馬であるかを考へた。」(註5)

このように、敏感な才人芥川も、志賀直哉の前ではカタなし、と当時の文人の間で噂されていた。しかし自分を讃美する芥川に対して志賀直哉が軽視していることになると、どうも疑問を持たねばならない。

志賀直哉が芥川追憶文「沓掛にて」の書出しではこう語っている。

「私は芥川君の死を七月二十五日の朝、信州篠の井から沓掛へ来る途中で知った。それは思ひがけない事に違ひないが、四年前武郎さんの自殺を聞いた時とは余程異つた気持だった。乃木大将の時も、武郎さんの時も、一番先に來た感情は腹立たしさだったが、芥川君の場合では何故か「仕方がない事だった」と云ふやうな気持がした。私にさう思ふやうな材料があつたわけではないが、不思議にさう云ふ気持が一番先に來た。

幾月か前の『文芸春秋』に芥川君は自分の脳のあらゆる皺に虱が行列を作り、食ひ入つてゐる想像を書いて居た。これなど如何にも心身共に衰弱した人の想

像らしく、見て私は身ぶるひを感じた。

兎に角私が会った範囲では芥川君は終始自身の芸術に疑ひを持って居た。それだけに、もっと伸びる人だと私は思っている。

それから私は自分がかういふ静かな所にあるせゐか、芥川君の死は芥川君の最後の主張だったといふやうな感じを受けてゐる。」(⑩6)

この追憶文を読むと、死者への礼儀もあるだろうが、志賀直哉はその死によって「気取り過ぎ」から脱出し、その気取らない芥川への親近感に満ちているのではないか。志賀直哉の芥川への愛惜の情が簡潔な文章の行間にしみじみとゆきわたっている。生前の「気取り過ぎ」の芥川は、死によって「気取り」を捨てて志賀直哉へアプローチしたとも考えられる。

正宗白鳥が聞いているように、芥川は志賀直哉の如何なる点にあのように畏服の念を持ったのだろうか、それは芸術上の問題だけに限られているとは思わない。先にも述べたが、創作の面においては芥川はある程度作品離れしているのに対して、志賀文学はその作品と人とを切離して考えることのできない作家である。芥川が「志賀直哉氏の短篇」論で初めに述べている志賀直哉の長所「何よりも先にこの人生を立派に生きている作家」というのは、おそらくこの辺の事情を指しているものと思われる。芥川は同じ論では更にことばを加えて「立派に? ——」人生を生きるというのは「道徳的に清潔に」生きるということであって、この道徳的属性が志賀氏の作品を「狭いところか、反って広くしている」と説いている。これは素朴とも言えるくらいの志賀直哉への賛美であるが、志賀直哉がこのような論理性を持った「立派な」人生の生活者であったところに、芥川は自分の最も及び難い点を感じていたのではなからうか。またここには、芥川が超越できない志賀直哉その人と文学の強さがあるのではないかと考えられる。

ところで、芥川が志賀直哉を文学の相手として意識したのはいつ頃であるかについてまた興味深い。大正六年十月十二日付けの赤木術平に宛てた書簡では芥川は「和解」を読んで以来どうも小説を書くのが嫌になったと訴えている。これについて「夏目先生」という談話にまた次のような記録を残している。

「或時、僕が、志賀さんの文章みたいなのは、書きたくても書けないと言った。そして、どうしたらああ云ふ文章が書けるんでせうねと先生に言ったら、先生は、文章を書かうと思はずに、思ふまま書くからああ云ふ風に書けるんだらうとおつしやた。さうして、俺もああ云ふのは書けないと言はれた」。(⑩7)

志賀直哉は大正三年十月に「寓居」を書き、大正六年四月に「佐々木の場合」「城の崎にて」を書くまでの三年間創作の筆を断っている。「沓掛にて」では、「芥川

君は三年間程私が全く小説を書かなかった時代の事をしきりに聞いたがった」の三年間は、この時期のことを指すのだと推測される。それだけに、志賀直哉は再び筆をとって「城の崎にて」「佐々木の場合」「好人物の夫婦」「赤西蠣太」を発表し、更に続く「和解」を発表した。そのために芥川は強い関心をそそられて、「どうも小説を書くのが嫌いになった」という結果になったと思われる。

さて、「和解」という作品はどこが、どのように芥川の創作心境に大きく影響を与えたのかについて、その作品を通し考察していきたい。

### 三、気分で生きてゆく人——志賀直哉の「和解」をめぐる

人と作品がそっくりで、作品と人とが切り離せない志賀直哉と、ある程度作品離れの芥川龍之介との間に異質的なものがあり、両者はとうてい交差できない部分があると思われる。

志賀直哉はよく自分の生活経験から取材する。これについて、広津和郎氏が『新潮』大正八年四月号にこう語っている。

志賀直哉は「常に自己及び自己に直接関係のある周囲のみを見つめている作家である。志賀氏の比較的数の少ない作品は、二、三の例外はあるが、殆ど氏自身がこの人生に於いて親しく見、聞き、触れ、感じたもののみから材料を取っている。如何なる作家の如何なる作物も、何等かの点でその作家自身を語らぬものはないといったような、そうした芸術の一般的性質を示す意味ではない意味で、云ひ換えれば、自己を語るといふ言葉の文字通りの意味で、氏は常に自己を語っている。この点氏は今の日本の作家中、最も多く自己の経験から材料を取る作家の一人であると云う事が出来る。(中略)抽象より具体、総合より個個——氏の眼はいつもそうした傾向を取って鋭く光っている。この意味で、氏はかなり徹底した立派なりアリストである。」(註8)と評価している。

「和解」は一篇の作品として、志賀直哉の芸術と生活、生活と倫理、家族関係それから心理変動などを鮮やかに表現し、読者の前に呈している。

志賀直哉自身もこの作品の成立事情について「和解」はしがきで詳しく説明している。

「「和解」は長い間、不和だった父との和解が出来た時、その喜びと亢奮から一ツ氣に書いたもので、私の作品としては特殊なものである。技巧など余り考へる事なく、一日十枚平均、半月で書きあげた。丁度メ切日だったので、読み返しもしせずに渡したが、他の人では珍らしくない事かもしれないが、早業の利かぬ私では稀有の事だった。この小説の欠点として、よく挙げられるのは和解

は書いてあるが、その前の不和を具体的に書いていない（中略）と云ふのだ。これは一応尤もな評で、若し出来れば、それも書いて、作品としてもっと完全なものにしたかったが、当時の私にはその余裕はなかった。私は只、和解の喜びを動因として書いたので、さういふ時に不和の原因を読者のために精しく書くといふ気持ちにはなれなかった。私自身では不和の原因を書かずに和解の喜びを現はせた点を寧ろ満足してゐる」。(註 9)

「和解」は、この調和的な気分が萌してから、「自然」な和解へたどる過程が描かれ、人間の感覚的、感情的な独立が作品の中に生々しく現れている。

志賀直哉と父との不和は、彼の半生を通じての大事件である。「和解」という作品では突然の形でその和解が到来することを描いていた。その父子対立、葛藤から来る、と同時にそれが深められるもとともなったいくつかの事件があるが、要約すれば思想的な対立と婚姻問題の二点に絞られると思われる。

父が、子の創作によって生きようとする志向を認めず、子の自我を全面的に無視し、否定する。血統的に言うなら、共に我執が強く、相互に譲らず、ついに子が出家によって、父子関係は永久に決裂するに至る。

志賀直哉の年譜に見られるように、明治三十四年（1901）十八歳のときの、足尾鉾毒事件をめぐる対立、衝突は長年にわたる直哉と父との「不和」の発端である。この対立の頂点は、大正三年（1914）三十一歳の年の十二月、勘解由小路資承の娘康と結婚することによって「父直温は、この結婚に不同意。翌年二月、京都市外衣笠村役場に結婚届を出した後、父の家よりすすんで除籍され、別に一家を創設した」。(註 10) ということである。

それ以来九年の歳月が経って、大正六年八月に父との「和解」は、こういう現実の上に実現したのである。志賀直哉が自ら父の座に座り、対他意識も徐徐に変化してくる。志賀直哉が子の立場の「自分」は、父に対する「私怨」の情は持っているが、それはすべてではなかったのである。他方に心から父に同情している自分が一緒に住んでいたと告白する。それで不和を「書く事で父に対する私怨を晴らすやうな事は仕たくないといふ考が筆の進みを中々に邪魔をした。(略)丁度十一年前父が「これからは如何な事があっても決して彼奴の為に涙は溢れない。」と人に云ったと云ふ。そして父がそう云ひ出した前に自分が父に対して現はした或る態度を憶ふと自分は毎時ゾツとした。父として子からこんな態度をとられた人間がこれまで何人あらう自分が父として子にそんな態度をとられた場合を想像して堪えられない気がした。父がさう云ったと聞いた時に父の云ふ事は無理ではないと想った。そして自分も孤独を感じた。」(註 11)

「和解」の主人公は、父となることによって、血縁関係に刺激され、敏感に反応する。「和解」は、冒頭に書いてあるように七月三十日は主人公にとって最初の子の一周忌の日である。作品はここから書き始める。そして、クライマックスの父との和解の実現は、その八月三十日の実母の二十三回目の命日に設定する。このような肉親の死は、主人公の父親との和解というテーマを支え、和解に対して重要な役割を果たしている。

「和解」全作品の時間は三つに分けられている。作品内の現在時は、一・二章と十一章から十六章まで流れているわけで、三章から十章まではすべて過去の時間なのである。

第一章で「自分」は死んだ子どもの墓参りに我孫子から上京している。そして、子どもの墓に参る前に、祖父と実母の墓に行き、その前をぶらぶら歩いている。そのとき、「自分」の心には亡くなった祖父と実母が蘇ってくる。その祖父に対して自分には「今日祖母に会ひに行きたいと想ふが」という相談が浮かんた。「会ひに行ったらよからう」とすぐその祖父が答えた。ここでは「自分」のすべての感情や願望が祖父の声を通して表されている。亡くなった祖父は、志賀直哉の主観の影像として、小説に登場し、父との和解を勧めてくれる。

「自分」は「父」に不愉快を与えるのは好まないけれども、会うのは尚嫌だった。「父」に対立するのは意識的には避けたいが、感情的には許さないのである。第七章の中にある青年を仮託して、父と子の対立の激しさを書こうとしたが、結局これを避けるようになった。

「父は絶対にこの青年を自家の門から入れまいとする。その他いろいろそういう場合父と自分との間に実際に起こり得る不愉快なことを書いて、自分はそれを露骨に書くことによって、実際にその起こることを防ぎたいと思った。みすみす書かれたようにはわれわれも進まずすませることができようと思ったのだ。そしてその最後に来るクライマックスで祖母の臨終の場に起こる最も不愉快な悲劇を書こうと思った。(中略)父が青年を殺すか、その青年が父を殺すか、どちらかを書こうと思った。ところが不意に自分にはその闘争の絶頂へ来て、急に二人が抱き合って烈しく泣き出す場合が浮かんて来たのである。この不意に飛び出してきた場面は自分でも全く想ひがけなかった。自分は涙ぐんだ。」(註 12)

この父と自分の間に残っていそうなものは、父子を結ばせている血縁関係だと思う。父子抗争の悲劇を構想し、そのクライマックスで悲劇は頂点に達するはずだったが、突然逆転した場面が浮かぶので、その場面が浮かんたことによって、実際の父子の関係の中の対立は頂点まで発展させたくない、無意識に感情的にそ

れを避けたいのである。

「和解」においては親しい肉親の死は作品全体を色濃く包んで。実母と実子の死の他に、もうひとつの死のイメージが作品全体を貫いている。それは、主人公が誰よりも愛している祖母の衰弱である。「自分」にとって、祖母の死の可能性ははっきりと意識されている。「自分」は「実際、祖母の死を恐れた。祖母の死の場に怒る父との不愉快な出来事を想像しても、それは恐ろしかった。然し、それより兎に角祖母にはもっと生きてゐて貰ひたかった」。そして、第十三章では、父に自分が和解したいという願望を打ち明けるとき、このような会話がある。「お父さんと私との今の関係を此儘続けて行く事は無意味だと思ふんです。」「よろしい。それで？お前の言ふ意味はお祖母さんが御丈夫な内だけの話か、それとも永久の心算で言ってるのか。」「それは今お父さんにお会ひするまでは永久の気ではありませんでした。お祖母さんが御丈夫な間だけ自由に出入りを許して頂ければよかったです」。言い換えれば、主人公と父親との和解は、祖母の病気を仲立ちとして成立したとも言えよう。

作品の中で父親との和解の場面と共に重要なのは、赤児の死と二番目の赤児の誕生があげられる。初めての赤児の死は、実母の死や祖母の死の不安と共に、主人公に血縁の喪失感を与える。このように赤児の死が血縁の喪失感を与えるものとすれば、第二番目の赤児の誕生によって一度喪失された血縁意識をもう一度獲得するようになる。作品に見られる二番目の赤児の誕生ともう一人妹の赤児の誕生という二つの生命の誕生は、また主人公の血縁意識に新鮮な内容を与える。そして、赤児の名前を祖母の名前からとって「留女子」にし、やかて死に行く生命からこの世に生を受け、これから育っていく新しい生命への伝達の意味が読み取れる。

亀裂した家は再び元に戻る。長い間の父との不和が和解を遂げ、家族七人で青山墓地へ墓参りに出かける。

別れるとき、「自分」が車の上の父の眼の中に「快い自由で、愛情の光のわく」のを確認した瞬間に「和解」は実質的に成立したといえよう。

志賀直哉は父と対立、葛藤し、結婚によって除籍までされたが、自分が父となるにつれ、調和的精神に目覚め、家族関係まで全面的に和解に至ることによって、「家」へ回帰した。「和解」ではこの「家」へ回帰する循環的な図式構造をわれわれの目の前に呈してくれる。志賀直哉と「家」とのつながりという点から考えると、この構図はきわめて象徴的な意味を持っていると思われる。

志賀直哉は非常に個性を持っている作家で、武者小路実篤は次のように述べて



いる。「志賀がよく他人と絶交しかけたり、したりするのはその神経の仕業だ。そしてそれが自分の誤解だと気がつけば自分の方であやまることに吝ではない。しかしその神経に逆つてまで他人と和解しようとは中々思はない。その神経は中々暴君だ。感じが早い、そして時には志賀の心の支配者だ。理性に勝つこともある、志賀の理窟は時々神経のおともをしてゐる。其所が如何にも志賀らしい」。

(注 13)

勿論、このように激しく父と対立、葛藤をして、そして調和の気分に目覚め、和解へ辿り着くことは志賀直哉にしかできないかも知れない。彼は父に対して恐れない、強い子だから父性に鍛えられ、父性が強い文学を築いた。このことが芥川には考えられない、中々できないことだと思う。芥川は父不在の家庭に育ち、父性に鍛えられなかった弱さが彼にあると思う。芥川は養父や養母とはほとんど無関係に、実母の姉に当たる伯母の手で育てられたのである。家の問題に直面したとき、その表現方法が志賀直哉と全く異質的なものを現してくる。それは「僕が、志賀さんの文章みたいなのは、書きたくても書けない」の根本的な原因ではないかと考える。

#### 四、「或阿呆の一生」と「河童」における芥川龍之介とその「家」

日本近代文学において、「家」は避けては通ることができない大きな課題である。しかし、芥川龍之介とその「家」を問題として取り上げて論じたものは少ない。昭和二十三年五月の「文学」で発表されたものに片岡良一氏の「芥川龍之介と「家」の問題」という古い論文がある。片岡氏は芥川における家の問題は、「物質的な負担と、思想生活の齟齬と、家族制度の残りかすが、二重にも三重にも絡み合って」いた重苦しいもので、「彼は、その二重にも三重の重荷のためにも、押しつぶされかけていたのである」と書いている。それは芥川のみならず、「そこに自然主義以来持ちこしのいろいろな問題を感じていながら、それをどうにもならぬものとして半ばあきらめていた——むしろ時にはそれを支える「人情」をいわゆる人間味として讃えようとさえしていた。(略) そういう時代の空気の中で、同じところに問題(憎み)と愛情とを感じずにいられなかった。その心境的な分裂をどうすることもできなかったところに、芥川の苦悩の深さがあったことになるのである。そして、彼は、その問題の実相に迫ろうとしてその方法の工夫に耽るより、その苦悩のかげを主として捉えようとする作家であったのだし、それがまた新現実主義文学の少なくとも支流的なもの、一般の在り方だったのである」と結論している。

芥川は彼自身のぶつかっている家の問題に関しては、志賀直哉ほどそう多く書き残していない。彼は志賀直哉と違い、自分自身について語ることを好まなかったのである。作品にさらすよりむしろそれを隠そうとした人だと思う。彼は「澄江堂雜記」の中でこう述べている。

「もつと己れの生活を書け、もつと大胆に告白しろ」とは屢、諸君の勧める言葉である。(中略) それだけは御免を蒙らざるを得ない。——第一に僕はもの見高い諸君に僕の暮らしの奥底をお目にかけるのは不快である。(略) 誰が御苦勞にも恥ぢ入りたいことを告白小説などに作るものか。」(「澄江堂雜記・告白」(註 14))

芥川は隠したいという気持ちによって、自分を取り巻く家の問題などについても、志賀直哉と異なり、豊富な記録を残していないのである。芥川にとっては「家」に触ること自体が苦痛と羞恥なのである。

中村真一郎氏は昭和 29 年 6 月の『文芸』に芥川龍之介の「家」意識についてこう説明している。「彼は家を否定することもなく、家と自我との間に巧妙な平衡を取りながら生きることを念じていたように思われる。そのためには、青春を自我と社会との調和のための実験に捧げる贅沢は許されなかった」。

しかし、芥川にとってあくまでもそれは理想に過ぎない。「彼はいつ死んでも悔いないやうに烈しい生活をするつもりだった。が、不相変養母や伯母に遠慮勝ちな生活をつづけていた。それは彼の生活に明暗の両面を造り出した。彼はある洋服屋の店に道化人形の立っているのを見、どのくらい彼も道化人形に近いかと云ふことを考へたりした。が、意識の外の彼自身は、——言はば第二の彼自身はとうにかう云ふ心もちをある短篇の中に盛りこんでゐた。」(「或阿呆の一生」(三十五 道化人形) (註 15))

こういう生き方が作者としての生涯をつうじて、重苦しくのそかかっていた。しかし芥川はその「家」の暗さに無頓着な態度で、それを直面しようとする人ではないようである。同じ「或阿呆の一生」の中にこう述べている。

「彼は或郊外の二階の部屋に寝起きしていた。

それは地盤の緩い為に妙に傾いた二階だった。彼の伯母はこの二階に度たび彼と喧嘩をした。それは彼の養父母の仲裁を受けることもないことはなかった。

しかし、彼は彼の伯母に誰よりも愛を感じてゐた。」。(略)

このように愛し合いながら互いに苦しめあう原因について芥川は考えようとはしなかったのである。明るい見通しは何一つ見出すことができないのがむしろ当然のように思える。「或旧友へ送る手紙」にはこう述べている。

「僕は何事も正直に書かなければならぬ義務を持ってゐる。僕は僕の将来に対するぼんやりした不安も解剖した。それは僕の「或呆の一生」の中に大体は尽くしてゐるつもりである。唯僕に対する社会的条件——僕の上に影を投げた封建時代のことだけは故意にその中にも書かなかった。なぜ又故意に書かなかったと言へば、我々人間は今日でも多少は封建時代の影の中にあるからである。(中略)のみならず社会的条件などはその社会的条件の中にある僕自身に判然とわかるかどうかとも疑はない訣には行かないであらう」。(註16)

「或阿呆の一生」には、結論的なものを書くことに対して、「河童」という作品には「家」に対しての具体的な描写がある。

関口安義氏は「河童」から「西方の人」へという論文には、芥川が「河童」の中にもたらしした心境は何かというと、それはもちろん彼の関心事であり、出産、産児制限、遺伝、家族制度、恋愛、結婚、芸術、官権の横暴、人口問題、食糧問題、失業問題、資本主義、宗教、自殺と実に多方面にわたっていると指摘している。

それらのすべては全部芥川自分のものとして、まじめに考えているのである。

「河童」は芥川が好きな河童の世界にことよせて、彼自分の思想を曝している。その中で出産の問題が取り上げられている。河童の国では子どもが生まれる前に父親から電話でもかけるように母親の生殖器に口をつけて子どもに問いかける。「お前は这个世界へ生まれてくるかどうか、よく考へた上で返事をしろ」と大声で尋ねると、自分の意志で生まれたくない子どもは「僕のお父さんの遺伝は精神病だけでも大変です。その上僕は河童的存在を悪いと信じてゐますから」(註17)と答える。

同じように出生自身を悪いとする考え方は「或阿呆の一生」の〈二十四 出産〉でも書かれている。いじらしい顰め顔をして高い声で泣き続ける赤児を見ながら、「何の為にこいつも生まれて来たのだらう？この婆婆苦の充ち満ちた世界へ。——何のためにまたこいつも己のようなものを父にする運命を荷ったのだらう？」(「或阿呆の一生」二十四 出産)という場面がある。(註18)

こいう生に対する疑問は、早く明治四十四年(1911)と推定される山本喜誉司宛ての書簡にこう書いてある。「しみじみ何のために生きてゐるのかわからない。(中略)種の為の生存、子孫をつくる為の生存、それが真理かもしれないとさへ思はれる。(中略)種の為の生存、かなしいひびきがつたはるぢやアないか。窮極する所は死乎、けれども僕にはどうもまだどうにかなりそうな気がする、死なずともすみさうな気がする。卑怯だ、未練があるのだ、僕は死ねない理由もなく死ねない、家族の係累といふ鍾はさらにこの卑怯をつよくする、何度日記に「死」

といふ字をかいて見たかしのに」。(註 19) 死を思いながら家族の係累の  
鍾のために死ねないのである。

芥川は人間的な存在を悪とし、生存によって生じてきた親子関係を否定し、し  
たがって生そのものを否定する。芥川の目に映った家のすべてが暗い、「家」の  
存在を疑いながらも自らそこを逃れる勇気がないのである。出生、親子関係に關  
する見方が「和解」に表れている志賀直哉の見方と明確に両極端なものである。

「河童」では「当たり前」の河童の生活ぐらい、莫迦げているものはありません。  
親子夫婦兄弟などと云ふのはことごとく互いに苦しみ合ふことを唯一の楽しみに  
暮らしてゐるのです」(註 20)。愛するがゆえに互いに傷つけ、苦しみあう  
ことで、これはまた芥川の親子関係、家族関係におけるあり方である。

創作活動に入ってから芥川龍之介にとって、家庭活動と創作活動の両立は大き  
な問題である。「河童」には、自殺する詩人ドックが「芸術は何ものの支配をも  
受けない、芸術のための芸術である。従って芸術家たるものは何よりも先に善悪  
を絶やした超人でなければならぬ」(註 21)という信条をもっている。ドックは「い  
つも孤独で詩人としても疲れてゐた」。

「ドックは或時窓の外を指さし、「見給へ。あの莫迦げさ加減を！」と吐き出  
すやうに言ひました。窓の外往来にはまだ年の若い河童が一匹、両親らしい  
河童を始め、七八匹の雌雄の河童を頸のまはりへぶら下げながら、息も絶え絶  
えに歩いてゐました。」(註 22)

ここである莫迦さ加減は家族制度というものを指しているであろう。同時に夫  
婦らしい河童が二三匹の子供の河童と一緒に晩餐のテーブルに向かっているの  
を見て、「あすこにある玉子焼きは何と言っても恋愛などよりも、衛生的だからね」  
(註 23) と言ひ、この玉子焼きは、日常的な家族生活の団欒、幸福を象徴してい  
るが、そのとき、ドックが「私には実はあの玉子焼きの色がなつかしく思へてな  
らない瞬間があるんだ」と告白する。

日常の幸福を否定して芸術至上の孤独な生活を選び取った厭世的な詩人ドック  
は、或瞬間には卵焼きのなつかしい色に涙ぐむ瞬間がある。芥川は日常的な哀歓  
や炉辺の幸福を常に否定するが、そこから完全に脱出することができない、そこ  
で悩み、疑いながら自分の文学世界を構築する芥川自身の文学理念、生涯を思わ  
せる。

## 五、まとめ

掘辰雄氏が「芥川龍之介論——芸術家としての彼を論ず——」中に、こう語っ

ている。

「日本現代の作家の中で、彼の最も愛し、最も恐れてゐる作家は、志賀直哉だった。最も「雑駁な」作家の一人だった彼が、彼が最も「純粹な」作家であると折紙をつけた志賀直哉氏を愛しずにはゐられなかったのである。志賀氏を真に理解し始めてから、そこに彼の芸術家としての悩みがはげしく起こった。彼は常に自己の雑駁なことを知りつつ、然も「雑駁なことの純粹なことに若かない」のを肯定しない訣には行かなかつた。さういふ彼が自己の芸術に対して不斷の疑念を抱いてゐたのは当然と言はなければならない」。(註 24)

「河童」において、芥川はロックという音楽家と比較して、「ロックは僕の影響を受けない。が、僕はいつの間にか、ロックの影響を受けてしまうのだ」といい、それは感受性など問題ではなく、「ロックはいつも安んじてあいつだけに出来る仕事をしてゐる。しかし僕は苛ら苛らすのだ。それはロックの目から見れば、あるいは一步の差かもしれない。けれども僕には十哩も違ふのだ」(註 25)と説明している。

「これは龍之介が、志賀直哉、葛西善蔵、或は佐藤春夫らと、自己の相違を暗に語つたのであろう。彼等は自己の素質に徹し、無造作に実感を以てそれを生かしている。けれども龍之介は常に反省して、教養と知識とを以て彼の才能が出来ているに過ぎず、素質に恵まれぬもののように考え、自己の境地と素質に安住し切ることが出来なかつた」。(註 26)

芥川は自分自身について語ることを好まなかつたが、われわれには「河童」と「或阿呆の一生」を通して、芥川の親子、血族、家族意識が垣間見えてくる。そこに現れている芥川龍之介的なものは、志賀直哉的なものとはまったく異質的なものが浮き彫りになる。それゆえ芥川は絶対に「和解」が書けないし、書こうと思わなかつたであろう。

志賀直哉は気分で素直に生きていくことに対して、芥川は都会人の特有の敏感を持って疑いながら生きていく。志賀直哉は芸術と生活をうまく調和し、それを肯定しながら創作活動を行うのに対して、芥川は生を否定し、芸術と実生活を対立させ、最後に苛苛せざるを得ない。芥川は志賀直哉を意識しながらも芸術と生活の間に平衡を保ち、両者の間には接点というものはないであろう。

注

- ⑩1 『芥川龍之介未定稿集』 葛巻義敏編集（岩波書店 昭和43年2月13日）
- ⑩2 『芥川龍之介全集6』（ちくま文庫 1987年3月24日 384ページ）
- ⑩3 『芥川龍之介全集』第九卷（岩波書店 1978年4月24日）
- ⑩4 『志賀直哉全集』第四卷（岩波書店 昭和30年7月25日）
- ⑩5 『正宗白鳥全集』第二十卷（評論二）（福武書店 1983年10月30日）
- ⑩6 『志賀直哉全集』第四卷（岩波書店 昭和30年7月25日）
- ⑩7 『芥川龍之介全集』第八卷（岩波書店 1978年3月22日）
- ⑩8 『広津和郎全集』第八卷（中央公論社 昭和49年2月10日）
- ⑩9 『現代日本文学選集』第一卷（細川書店昭和23年）
- ⑩10 『志賀直哉作品集』（角川書店 昭和57年7月30日）
- ⑩11 『和解』『志賀直哉全集』第六卷（岩波書店 昭和30年8月9日 78-79ページ）
- ⑩12 『和解』『志賀直哉全集』第六卷（岩波書店 昭和30年8月9日 78-79ページ）
- ⑩13 武者小路実篤『近代文学研究資料叢書』（一）『新潮』作家論集「志賀直哉の印象」（昭和46年11月25日 日本近代文学館）
- ⑩14 『芥川龍之介全集』第六卷（岩波書店 1978年1月23日）
- ⑩15 『芥川龍之介全集6』（ちくま文庫 1987年3月24日 464ページ）
- ⑩16 『芥川龍之介全集』第九卷（岩波書店 1978年4月24日）
- ⑩17 『芥川龍之介全集6』（ちくま文庫 1987年3月24日 189-190ページ）
- ⑩18 『芥川龍之介全集』第十卷（岩波書店 1978年5月22日）
- ⑩19 『芥川龍之介全集6』（ちくま文庫 1987年3月24日 457-458ページ）
- ⑩20 『芥川龍之介全集6』（ちくま文庫 1987年3月24日 193ページ）
- ⑩21 『芥川龍之介全集6』（ちくま文庫 1987年3月24日 194ページ）
- ⑩22 『芥川龍之介全集6』（ちくま文庫 1987年3月24日 193ページ）
- ⑩23 『芥川龍之介全集6』（ちくま文庫 1987年3月24日 193ページ）
- ⑩24 『掘辰雄全集』第四卷（筑摩書房 昭和53年1月30日）
- ⑩25 『芥川龍之介全集6』（ちくま文庫 1987年3月24日 215ページ）
- ⑩26 『芥川龍之介I』（吉田精一著作集）（桜楓社 昭和54年11月）

(LI・Guang-hua, 北京科学技術大学副教授)